

エリア

AREA

2008. 12. 15

No. 48

平成20年度 国土交通省地域振興アドバイザー派遣・中間報告

平成20年度のアドバイザー派遣は、第2回派遣が終了しつつあります。各地域とも第3回派遣に向けて動き出しています。また試験派遣については、2ヶ所を残すのみとなりました。

「エリア」は、各派遣地域とアドバイザーの皆さまを繋ぐニュースレターとして、年3回発行しております。2回目の今号では、派遣の中間報告として今年度派遣地域から8地域を取り上げ、課題説明と進捗状況をアドバイザーからご執筆いただきました。皆さまの取り組みの参考になればと思います。

岩手県／西和賀町

鳥取大学地域学部教授 光多 長温

1. 派遣地域の現状

岩手県西和賀町は、老人医療無料化でその名が知られる旧沢内村と湯田温泉で有名な湯田町が合併して誕生したもので、人口は7千人強である。交通は、北上市からと盛岡市からのアクセスがあるが、いずれからでも交通の便には恵まれない所である。しかし、温泉に加えて、錦秋湖の紅葉やりんどうの花の産地で有名であり、また銀河高原ホテルや地ビール工場もあり、夜空がきれいな空気が澄んだ地域である。

秀衡街道沿いに金が産出された時には、7,300人の鉱山労働者が働き、湯田町も人口2万人を数え栄えたが、鉱山採掘が中止され町は衰退した。最近では、公共事業の縮小による建設業の落ち込みの影響が大きく、また温泉入浴者も周辺施設との競合もあり減少傾向にある。アドバイザーは、宇都宮大学三橋先生、柏崎市春日さんと当方の3人である。

2. 地域の課題

西和賀町は4つの第三セクターを抱えている。(株)エステック及び(株)西和賀産業公社の二つが公の施設の管理運営、(株)湯田牛乳公社が自社施設の経営、(株)山の幸王国が、堆肥の製造販売を行っている。この中の(株)西和賀産業公社は、7つの町営温泉や道の駅及びパークランドの管理運営、すっぽん養殖等、業容を拡大している。90年代に地域総合整備事業債等を活用して次々に施設を拡大していったツケが回っているということもできよう。その他の施設もそれぞれの経緯の中でできたものであり、町村合併によってさらに錯綜しているのが現状である。町からの委託金支出合計は最近期では、約120百万円に達し、4社ともに繰越損失を抱えている。



牛乳公社

3. アドバイスの概要

まず、現地を案内していただき、経営データ等を精査し、現状把握に努めた。その上で、三セクの責任者、町長を始め、町の各方面の方々の話を聞いたが、皆さん、真摯に対応していただき、県の担当者の方々とも腹藏なき議論がやらせていただいております、大変気分よく取りまさせていただいている。何と云っても、町の担当者の畠山さんの誠実な対応にアドバイザー一同「何とかお役に立てよう」との思いを強くしている。データ整備等われわれの要求にも積極的に対応していただいております実態もほぼ把握することができた感がある。また、町の若い世代の方々とも町の将来について話し合った。

アドバイスの方向としては、次の点を基本線とすることで考えている。

第一に、三セクの再建と町の地域再生とのバランスを考えることである。不採算部門を全部切ってしまうと三セク問題は解決するかもしれないが、それでは町は縮小生産になってしまう。町の再生にとって重要な業務は何かこれを軌道に乗せることを考える必要がある。例えば、牛乳及び菓子事業は確かに赤字であるが、酪農家を抱えていることもあり、町の再生にとっては単純に切

り捨てるわけにはいかないであろう。今後の町の活性化の方向を前提として、このためにどのような三セクバランスが良いかを考えたいと思っている。

第二に、地域再生は最大テーマとして、三セクの効率化、再建も重要である。やむを得ないところは合理化するしかない。このバランスをどう考えるかが大きな課題であり、これに取り組んでいく方針である。

第三に、収支や委託金等の町からの支出のルール化である。収支尻合わせの支出では長続きしない。明確なルールを考えることが必要である。

4. 今後のスケジュール

第一回目の派遣で、現地及び周辺地域の視察、及び対象三セク施設の視察等を行った。また、各三セクの責任者、町長始め町の幹部の方々の意見をお伺いしたところである。そして、追加データも回答をいただいたところで、アドバイザー間で分析・検討を行い、第二回派遣（12月下旬の予定）で提言スケルトンを提示する予定である。この提言スケルトンを基に町や三セクとその現実性について議論を行い、一定の線が出れば、その具体的進め方や対策後の三セクの収支見込み等について作業を行い、最終的な提言を行う方針である。温泉、湖、星空、花・野菜等の素晴らしい地域資源を生かしつつ町の振興を図り、更には三セクが再生する方途を考えていきたい。なお、われわれアドバイザーの活動とほぼ時を同じくして町で、特に若い方々を中心として西和賀の産業を元気にする会合が持たれている。これとの連携も図って行きたいと考えている。

栃木県／那須町

(株)GENプランニング代表取締役 奥村 玄

1. 那須湯本の立地特性

那須高原はなだらかな東斜面と過ごしやすい気候が特徴で、那須御用邸もある日本を代表するリゾート地のひとつである。約8,000棟を数える別荘や観光牧場をはじめとする多くのレジャー施設があり、その中で那須湯本は那珂川支流の源頭部に位置する湯川沿いに広がる温泉町である。元湯「鹿の湯」は1,300年の歴史を持ち、川の両側の湯殿を結ぶ湯川橋付近はかつての「六橋六湯」と言われた温泉町の風情を湛えている。空海が開基したと言われる茶臼岳への登山客や山麓に咲き乱れるツツジを見に来る観光客は多いものの、宿泊客は新規掘削による温泉施設を備えた麓の大型レジャー施設に流れる傾向にある。閉じてしまった民宿や商店の空き家が目立つ。

2. 歩いてまちを点検する

今回の派遣テーマは「歩いて楽しい温泉街、湯本温泉活性化計画づくり」である。だから、1回目、2回目ともまちなかを歩くことから始めた。1回目は「温泉神社」をはじめ「殺生石」「茶臼岳」「八幡山のツツジの原生林」

「鹿の湯」など、いわゆる“名所”と温泉街を駆け足で回った。2回目は、温泉街のまちなかを丁寧に歩き、魅力と問題点を点検した。

かつては川沿いに道があったという。旅館や民宿の拡張により歩けなくなり、いつの間にか“裏”になり、建物と建物の間から川を見ることのできる一等地は駐車場となり車が占領している。また、山々の見事な紅葉が温泉街の背景となっているにもかかわらず、剥き出しのままの建築や擁壁によって蚕食されている。微妙な曲線を描く道は歩くのに魅力的なシークエンスを提供しているが、看板が川の景色をふさいだり、駐車禁止の路上マークが必要以上に目立つ等、魅力資源を活かしきれていない現状が浮かび上がってきた。さらに、湯本の生命線とも言うべき温泉のお湯が十分には活用されていない。例えば、神社の入り口に足湯があり車による来訪者も立ち寄っているようだが、実質的にはここ1ヶ所だけである。数箇所、飛び切り景色の良い場所に設けることで“足湯めぐり”の楽しみも増えるのではないだろうか。そのためには、お湯の権利をみんなのために一部共有化するような議論が必要となろう。現在は、まちなかを歩いてみても休む場所がない。一方、民宿には10連泊する湯治客もいる。食事のメニューに変化をつけたり、連泊客には料金面でサービスをするなど、個々の努力は見られる。しかし、長期滞在中にはあちこち出歩きたくなるであろう。まち全体として様々な工夫が求められる。



賑わう足湯

3. ビジョンを描く

長期的には茶臼岳の麓に交通拠点を設け温泉街の駐車場を大幅に削減することで、歩くまちとしての基盤を整えることが考えられるが、それには歩いて楽しいまちづくりを進めることが前提である。

次回までの宿題として、臼井アドバイザー（富士通総研）は、やるべきことを列挙して短期・中期・長期に分けて整理するという課題を提案された。溝尾アドバイザー（城西国際大学）は魅力資源と問題点を一目で分かる地図を作って考えようと指導された。私は儲かるか儲からないかという視点ではなく大切にしたい柱も議論してはどうか、と提案した。『自販機は10万円儲かる』という発想

から脱却し、人とのふれあいに価値を置いてみる。また、「六橋六湯」と言われた美しい景観を再生するためには、見慣れた街並みを多様な主体（子どもやお年寄り、女性）の多様な視点で発見的に捉え直す丁寧なまち点検を重ねるとともに、歴史から学ぶ姿勢も備えたい。そうすると、風の向きや川の音に配慮したり、背景や道のシークエンスを演出する植栽、無粋な駐車場への対応、子どもにとって楽しく遊べて安全なまち、おもてなしの気持ちを形にする等、考える手がかりはふんだんにある。

最後に、アケビやヌルデ等の地場の山野草をメニューに取り入れれたり、色で鮮度がわかるという温泉卵を積極的にアピールするために、活動に多様な視点を備えるために、振興協議会に女性に入ってもらうことも重要な課題ではないだろうか。

愛知県／西尾市

(株)タップクリエート代表取締役会長 二瓶 長記

1. 派遣地域の状況

愛知県西尾市は矢作川の下流左岸に位置し、人口104,321人（平成17年国調）で幡豆地区の中心都市である。西は矢作川を挟んで碧南市、南は一色町、吉良町に接している。

西尾市は江戸期には6万石の城下町として岡崎、吉田（現豊橋）と並ぶ三河の三都として繁栄した町で、市の中心市街地である本町には豪商が軒を並べ、その勢力は矢作川流域から三河湾、熊野灘沿岸まで及んだという。太平洋戦争後は工業都市として発展を見せてきているが、矢作川のもたらす肥沃な土壌に恵まれ、昔から米、野菜、花卉、果実等の栽培が行われており、特に、700年以上の昔に実相寺に茶種がまかれたのを振り出しに、市街地西方の稲荷山一体の洪積台地では、明治になってから本格的に西尾茶の栽培が行われるようになった。その後、大正期から抹茶の生産が主流となり現在に至っている。そのため、近年では、「西尾と言えば抹茶、抹茶と言えば西尾」といわれるように、抹茶の街というイメージが定着しつつある。



実相寺にある西尾茶の原木

こうしたこともあり、平成18年には、市制施行50周年を記念したイベント「ギネスに挑戦・一万人の大茶会」を街中で実施し、ギネスブックにも掲載された。これを契機に、市民あげての「おもてなし」の心を培う運動が盛り上がりを見せはじめ、観光振興にも関心が高まってきており、にわかに関光協会の役割がクローズアップされるようになってきた。しかも、設立のコンセプトも「世界一のおもてなしタウン」の創造、とかなり気張っている。

2. 地域の課題について

観光協会の役割に対する関心度が高まってきている割には、受入体制の整備がほとんどなされていないのが現況。その中核ともなる観光協会という組織は形としてあっても、行政主導型で本来の機能を果たしていないことから見直すべく、平成19年にはワーキンググループとしての「にしお観光まちづくり隊」を設立し、観光推進に関しての調査や議論を進めてきており、平成20年には観光協会法人化検討委員会を設立し、民営法人化への新たな取り組みへの模索が始まった。観光協会の民営法人化への趣旨も、①おもてなしの心の育成と実践、②西尾固有の歴史・伝統文化の継承、③観光資源の掘り起こしと商品（特産品、土産品）開発、④三河観光ネットワークとの提携による広域観光の推進、となっており、「歴史と文化・活力と感動のあるまちづくり」の推進を謳っている。

しかし、その道のりは険しく民営化にあたっての自主財源確保の目途も立っていない。さらに、西尾市内には観光資源なるものが乏しく、近隣の町との連携による観光振興策も視野に入れる必要がある。このような課題をどのようにクリアするか。さらに、従来行政主導型で行ってきた市内の各種祭りやイベントを観光協会主導にするためには、民間主導型の法人にするより方法がないとの結論に達した。しかし、単に法人化とはいってもさまざまな形態がある。西尾市にとってもっともふさわしい法人形態はどれなのか。さらに法人運営の方法や事業活動のあり方など、民営化にあたっての検討課題は数え切れない。

3. アドバイスの方向と今後の期待

アドバイザーに対する期待は法人化への課題のクリアと事業活動への具体的提言であり、民営化への道しるべである。法人化には財団法人、公益社団法人、一般社団法人、NPO法人、営利法人などがあるが、いくら民間主導とはいえ、観光については、行政がまったく手を引くということがあってはなるまい。どの法人形態にするかは観光協会の今後の生き方にも関わりをもってくる。しかし、これからの観光協会の役割は誘客のみでなく、足元の資源の整備やブラッシュアップ、さらに観光によるまちづくりである。観光協会事業の主な内容は観光に関する調査研究、観光まちづくり、観光商品づくり、情報戦略、自主事業推進、会員増強などが考えられる。このようなことを各地の事例を挙げながら助言をした。同時に、観光協会組織のあり方、運営の仕方等のアドバイス。今後さら

に検討を加え、西尾市にもっともふさわしい観光協会活動のあり方や運営方法を探る必要がある。

兵庫県／加西市

(株)地域まちづくり研究所代表取締役 伊藤 光造

○肥沃な土地と豊かな文化

北条地区は、兵庫県南部、JR姫路駅から北西に約25kmに位置し、人口5万を擁する加西市の中心市街地である。もともと西国脇街道の宿場町であるが、地域の拠点として大に栄えた街で、戦後には三洋電機が当地で創業し、一頃は企業城下町として殷賑を極め、商店街もおおいに賑わっていた。しかし時代は変わり、近年商店街も衰退の一途をたどり、昨年三洋の工場が閉鎖され、街はすっかり静かになってしまった。

○まちづくり活動の萌芽

そんな状況下ではあるが、平成14年に北条まちづくり協議会が自主活動をスタートさせた。メンバーは、北条地区の13町から2名ずつ選出された総勢26名の会員からなり、歴史・観光・景観・環境・防災の3分科会が編成されている。活動は、毎月の協議会ニュースの発行を始め、街のマップの作成、花の植栽、スツールの製作、北条の宿を謳うイベント開催、他都市との交流、小学校の総合学習への協力などである。

○試験派遣でわかったこと

昨年10月、伊藤が、試験派遣で訪問し地区の状況を見せていただいた。街の状況が急速に変化するなかで、誰に何をアドバイスすればよいのかが、必ずしも明確でなかったためである。

まちづくり協議会等の状況、細街路整備の状況、大規模店舗の出店の状況なども伺い、おおむね次のような方針で臨むことを助言した。

- ①やはり北条まちづくり協議会へのアドバイスを中心としたらどうか。
 - ②寺社を含め潜在歴史資源が多い。これを生かす活動の継続が大切。
 - ③活動充実のため、体制を拡充すること。
 - ④手始めに街並みを生かす祭りを行ったらどうか。
- などである。

○なんと早速お祭りを実施

ちょうどアドバイスのタイミングもよかったとみえ、なんと早速今年度、宿場まつりが実施の運びとなった。協議会のメンバーが実行委員長となり、多くの団体・グループの協力を得て実施された。名付けて「北条の宿はくらんかい」。この10月18、19日に行われたが、多くの人出で賑わい往年の街をほうふつとさせる大盛況であった。

町家・空店舗30軒を活用したチャレンジショップ、地区の3寺では地元高校生の播州歌舞伎など多彩なパフォー

マンス・コンサートなどを実施、神社では植木市が催され、探検・発見スタンプラリーが行われるなど盛り沢山であった。また北条鉄道祭りや商工会の地場物産展も同時開催され、にぎわいを盛り上げていた。

私も初日に訪問見学し、楽しませて頂いた。主催者側や来訪者それぞれが皆、実に楽しそうな表情であったことが、印象的であった。はじめての試みにも関わらず、大成功といってよいのではないだろうか。



賑わいをみせる「北条の宿はくらんかい」

○本年度初回のアドバイザー派遣

9月23、24日に、本年度第1回のアドバイザー（AD）派遣が行われた。木原勝彬ADは、社団法人奈良まちづくりセンターを立ち上げ、奈良町のまちづくりを進めてきた方である。高木敦子ADは、静岡県新居町などで歴史を生かしたまちづくりのコーディネートを進めている。北条地区にとって、奈良町はかなり高い到達点を示す目標であり、新居町はほぼ一緒に歩く友人といった感じであろうか。北条の方々にフィットしたアドバイザー環境をプロデュースできたのではないかと考えている。

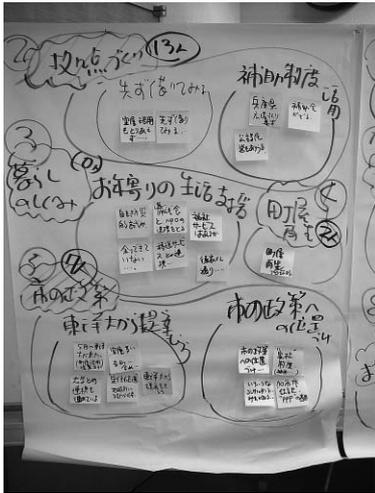
さて初回ではあったが、初日は現地見学のあと、奈良町と新居町の事例を紹介いただき、伊藤のアドバイスメモを紹介した。2日目にかなり突っ込んだ議論となった。なにが課題なのか、まちづくり協議会の面々とADのやりとりをリアルタイムでポストイットKJで整理し、それをふまえ以下に示す7つほどをピックアップできた。

- | | |
|---------------|-----|
| ①組織の拡充 | 6人 |
| ②拠点づくり | 13人 |
| ③暮らし支援の仕組みづくり | 0人 |
| ④町屋再生プロジェクト | 2人 |
| ⑤市の施策の推進 | 7人 |
| ⑥イオンとの連携 | 5人 |
| ⑦景観地区導入について | 1人 |
| ⑧プラン・ビジョンづくり | 5人 |
| ⑨ここなりの細街路整備 | 1人 |

そのなかであらためてクローズアップすべき課題について挙手をしたところ、上記の結果となった。2回目のアドバイザー会議ではまず②、⑤、①について議論を深める方策を見出すことを試みたい。

○岐路に立ち、歩み始める・・・

実は、三洋電機加西工場の跡地が、本年11月1日、イオンのショッピングセンターとなってオープンし、とりあえず、新たに大きなぎわいの核が誕生した。しかしこれに接する北条地区のまちは、再生に向かえるだろうか。今まさに岐路に立っている気がする。すでに新たな方向への歩みは始まっているが、まだまだ、先が見えている状況とはいえないと思う。非常に大切な時期であることは確かだ、アドバイザーとしてもあらためて気持ちが引き締まる思いである。



KJ法でまとめられた地域課題

鳥根県／益田市

早稲田大学教育・総合科学学術院教授 宮口 侗迪

1. 派遣地域の状況

益田市二川地区は、益田市の市街地から車で30分ほどの山あいにある、人口およそ300人の地区である。旧美都町の益田市への合併に伴い益田市の一部となった地域であり、集落は上流部も含めて基本的に谷あいの低地に水田を開いて成立したものがほとんどである。地形的制約の中でひたすら水田を基盤に生活してきたわが国の農山村の典型とも言える。1回目の訪問は8月31日～9月1日であったが、緑の山々の間の谷が黄金の稲穂で埋まり、赤い石州瓦の屋根が陽光に映え、風景からは、本来の地域が持つ豊かさが特に読み取れる2日間であった。

二川地区の有志は、郷土がいつまでもその輝きを失うことなく、安心して暮らせるまちであり続けるために何をなすべきか考えるために、合併の年の平成17年9月に「二川の未来を創る会」を結成した。この会には、福祉・エコ・教育、コミュニティー、産業・経済・建設の三つの部会が置かれ、何と2年あまりの間に100回に及ぶ会議を重ねてきた。この成果が充実した「二川まちづくり提言書」にまとめられた。ただ、この「創る会」は、まだまだ政策集团的性格が強く、実践集団にはなっていない。これからどのような実践を重ねていくべきかという課題を乗

り越えるために、今回のアドバイザー派遣要請となったものである。

2. 地域の可能性と課題

1回目の訪問時には、地区を一回りして、第三セクターの経営する日帰り温泉施設と道の駅の販売施設と食堂などを見せていただき、会の主要なメンバーから今までの活動の経緯を、詳しく聞かせてもらった。みんなで支えあいながら、この地域をよい形で後世に残したいという思いが強く伝わってくる報告であった。しかし具体的に誰が何をやるのか、何が出発点になるのかというスタートダッシュの形が、まだメンバーの頭に浮かんでいない様子であり、いかにしてここから実践部隊をつくっていくかを考え、共有する方向に動いていくのが急務であると思われる。その観点からは、すばらしい提言書も、優等生の作文で終わるおそれがあるように思われた。

筆者は、わずか300人の地区なのだから、その構成メンバーの持つ力をみんなが知り、誰がどこで力を発揮できるかをキャッチしておくことが不可欠で、その作業をまずやる必要があると考えた。そこで次の会までに、住民の特技や能力に関する人別帳のようなものをつくることを提案した。同行した寺川・朝田両アドバイザーからも、地区の宝物（資源）や眺めのよい場所、いろんな問題点について、住民の思いを把握するよう提案があり、「創る会」で何とかそれに対応することになった。

初日の夜には、二川の「地域の食文化を学ぶ会」の女性たちが多数集まり、地域の食材でつくった料理が、広間いっぱいになぶ夕食会を開催していただいた。すばらしい会であったが、「創る会」と「学ぶ会」が今のところは連携があまりない状況で、これは何とももったいないというのが、アドバイザー共通の意見であった。

2回目の訪問は、11月29～30日であった。前回の宿題に対して、住民に相当詳しいアンケートを実施し、回収率も80%を超えたということで、やはり地域に対する住民の思いの強さが明らかになった。アンケートの結果に基づき、寺川アドバイザーの指導で、二川の自然資源、人文資源、貴重な人材などをマップに落とす作業を行い、朝田アドバイザーは数人のメンバーと一緒に、貴重な人材



皆の意見を整理するアドバイザー

からの聞き取り調査を分担し、宮口は風景や眺望の再確認に回った。

2日目には、あらためて今までの成果を踏まえて、当日参加のメンバーにどのような活動を始めたいかをポストイットに書いてもらい、寺川アドバイザーのリードで意向を確認し、分野別に整理した。主な項目としては、支えあいのしくみ、地域のシンボルづくり、農林業を元気に、ワザをクローズアップ、食の魅力を磨く、歴史・文化を見直し守る、交流しよう（まつりの創造も含めて）などが浮かび上がり、名前付きの意見として共有することになった。ここから、人と組織のさまざまな組み合わせによる実践の兆しが生まれて来るかどうか3回目の課題となる。

山口県／長門市

(株)ラスアソシエイツ代表取締役 島村 美由紀

1. 地域の状況

山口県長門市は日本海に面した人口4万1,000人あまりの風光明媚な町で、活発な漁業の他に多くの温泉地がある。その代表的温泉地である「湯本温泉」は、山口県下で最も古い歴史を持ち、約600年前に開泉された由緒ある名湯で全国から観光客を集客してきた。

しかし、日本の人口減少や団体から個人への旅行スタイルの変化等、ご多分に漏れず全国の一般的温泉地が抱える“宿泊客減少”という問題に悩んでいる。平成9年の大河ドラマ「毛利元就」、平成13年の「山口きらら博」開催、平成15年の大河ドラマ「武蔵 MUSASHI」、同じく平成15年の「金子みすゞ記念館」開館という集客トリガーのあった年は年間宿泊客数が30万人を突破するものの、それ以外の年は20万人台であり、平成19年は25万人という過去11年間で最低の数字を残す結果となってしまった。このため、再び湯本温泉が賑わいと活気を取り戻すための動機づけの研究開発を「湯本温泉旅館協同組合青年部」が軸となって検討を始め、我々アドバイザーに助言が求められている。

2. 地域の可能性と課題

前述した「湯本温泉旅館協同組合青年部」は湯本温泉にある12軒の宿の次期経営者が集まった会（現在6名在会）であり幼少時代からの馴染み仲間で結束が固いため、現状の地域問題を共有化できており「何かやらねば!」という意識と行動力を持ち合わせている。このメンバーの絆が湯本温泉における大きな可能性であろうことを、第1回目のアドバイザー派遣では感じる事ができた。

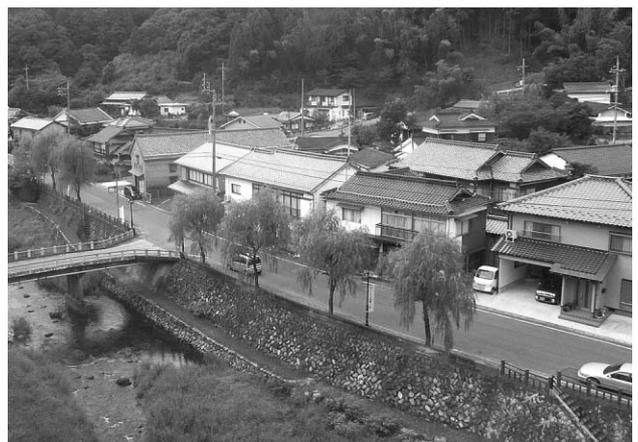
現在、この青年部が実現させる課題としているのは、①観光客の街中回遊（散策）を促す仕掛けづくり ②その結果がもたらす地域内経済活性化による地域住民の安定居住という2点である。

たいへん大きな2つの難題ではあるが、さすがに若いチームメンバーだけに、すでに具体的活動が数年前より始

められている。音信川（町の中央を流れる川）の伝説を生かした「恋文コンテスト」（2004年開始）、橋のライトアップ「音信りばぶりお」（2007年開始）、若旦那による夜市の開催「じゃらんじゃらん」、夏休みやバレンタインに合わせた花火（2005年開始）・屋台等、派遣時の報告は盛りだくさんで、恋文コンテストはすでに4回の実績を誇り作品集も発行されている。また、2006年には「恋人の聖地」の認定を受け記念碑が設置され、碑を背景に写真を撮る観光客の姿を筆者も目撃し、青年会活動が徐々に観光客の目にとまってきた状況がうかがえる。

これらの活動について、各アドバイザーは好評価をしたが、以下2点の指摘を伝えた。1点目は、音信川の恋の伝説をトリガーとしてカップル集客・恋の成就等の打ち出しをポイントにしているが、その表現方法が男性目線で考え実行されているため、“女性客の今どきマインド”を捉え切れていないということ。また、競合市場が多くて飽きっぽい人口減の若年層に向けた企画の打ち出しがベースとなっているため、人口多のミドル・シニア層（新たな人と人のコミュニケーションを求める世代）に向けたメッセージ性の検討等、ターゲットを再考する必要がある。2点目は、全ての実行施策が“イベント”であり一過性で終わるものだけに終始しているため、恒常的な集客力の原動力になり得ていないということ。町の中に何らかの継続性を持つ仕掛けを打ち込むべきである。

結束の固い青年部の存在に大きな可能性を感じつつ、現青年部の活動に対する問題点を検討したが、会合には住民の参加もあり、地域の人々の関心の高さもうかがえた。



散策可能な川べり

3. 今後の検討テーマ

アドバイザーの地域視察において、町の中央を流れる音信川に町の人々の意識が集中してきたが、観光客の街中回遊促進には環境を管理・コントロールしやすい狭域ゾーンに絞り、そこに集中した賑わいや温泉地らしい仕掛けを打ち込むべきというアドバイスにより、町の中心にある市営公衆浴場「恩湯」「礼湯」エリアで空き家が複数件あるが、情緒ある小路的雰囲気を残したゾーンに注目し、次回以降の具体的な仕掛け方を検討テーマと設定した。また、町活性の主体となる組織とその運営方法につ

いても、宿泊事業者だけではなく商業者や一般住民の参加を実現するあり方について、次回の検討テーマとした。

夏には蛍が生息し、萩焼深川窯元が5件あり、曹洞宗の名刹・大寧寺、そしてレトロな温泉街という資源が十分にある地域なので、今後の結束ある若手経営者たちの活動を、残る2回の派遣でバックアップしていきたい。

大分県／臼杵市

立教大学観光学部教授 安島 博幸

九州は、石仏、石橋、石造の水道橋、城など石造文化が豊かに残る地域である。今回、アドバイザーとして依頼を受けた臼杵市もそのような地域で、市内には、国宝の臼杵石仏群があり地域で最大の観光資源となっている。

しかし、近年石仏への観光客数が減少を続けており、それに対して地元の観光関係者が集まり、対応策を検討してきた。その検討の成果の一つとして、地域の散策マップを作成し、配付することにしたが、マップのデザイン、内容などについてアドバイスが欲しい、というのが地域からの要請であった。臼杵市に伺ったのは、8月末のことであった。ちょうど、この日は、「石仏火まつり」が実施される日に当たっており、年に一度の夜の石仏観光ができるのが楽しみであった。

夕方、臼杵市に着き、食事後、「石仏火まつり」の会場に向かった。この日だけは、特別に石仏群に夜間照明が行われ、周りにある公園では、竹筒を使い、油を燃料とした竹灯籠が数百灯ともされて幻想的な雰囲気を醸し出していた。石仏群は、山の山麓に4カ所に別れて存在しており、それぞれに想像していた以上に見事な佇まいだった。ただし、石仏の近くでかがり火を焚いたりもしているが、照明の中心は、蛍光灯などによるものであり、全体的に明るくはなっているが、夜間照明をすることの新たな価値が生み出されていないように思われた。同様に、下の公園で行われている竹灯籠などによる演出などを含めて、さらに火まつり自体を考え直すことが必要であろう。火まつりの当日は、普段は、500円を徴収している石仏の拝観料が、無料になることも、他の日の入り込みに影響



年に一度石仏火まつりにはライトアップされて夜も公開される

していないだろうか。まつりの日に無料で入場した客は、普段の日に有料で来たいと思うだろうか。まつりの時には、大量に集まる客に対して、十分なサービスができていだろうか。普段ならゆっくり食事をするところを屋台もので済ませている人が多いのではないか。つまりせっかくのお客を無駄にしている可能性がある。

また、臼杵市は、城下町としての長い歴史があり、臼杵城を中心に歴史遺産にも恵まれた場所である。近年、町並み整備や再開発が行われ、歴史観光、町並み観光、町歩き、食べ歩きなどに訪れる人が増えている。特に城下町だっただけに豊かな食文化が魅力で、ふぐ料理屋だけで、20軒もあり、遠方より料理を楽しみに来る客も多い。

さて、翌日、以上のように市内と周辺の石仏と観光資源を視察した後、地域の方々と懇談した。ここで当初アドバイスの要請があった「散策マップ」の案を見せていただいた。熱心な議論の末に描かれただけあって、従来に較べて、多くの改善点が見られた。

しかし、この「散策マップ」作成だけでは、石仏観光客の減少を本質的に改善することには、不十分に思われた。石仏観光を活性化するには、まずは、「石仏観光の魅力・価値」を高めていくことが必要であろう。また、マイナスになっている要素を減らすことも大事である。そこで、アドバイザーからの意見を述べた上で、議論を行い、次のような改善提案を行った。

- ①石仏を巡る山道に入れば、静かで緑豊かな環境で満足できるのだが、そこに至るまでが、バスがたくさん停まれる殺風景な駐車場や参道として相応しくない建物などがあり、国宝である石仏の場所の趣を阻害している。マイナスの要素の改善が必要である。
- ②石仏の夜間照明についても改善の余地が大きい。夜間照明は昼間とは違った新たな価値を生み出す。火まつりの日以外にも公開することにより新しい客層を創出できる。
- ③臼杵市内には、たくさんの都市観光客が来るようになっており、市街地と連携することにより相乗効果を生む可能性が高い。
- ④土産物についても、地域の素材を活かしたものに工夫する余地がある。
- ⑤散策マップについてもより完成度を高めるために意見を出し合う。

以上のような改善の方向を踏まえて、次回までにお互いに案を持ち寄り、検討を進めることとした。

大分県／由布市

(株)地域計画研究所代表 井原 満明

1. 川西地区の概況

由布市は、大分県のほぼ中央に位置し、平成17年(2005年)10月1日、大分郡挾間町、庄内町、湯布院町が合併して発足した。今回アドバイザー派遣の対象地域である「川西地区」は、旧湯布院町にあり、温泉で有名な

由布院の南側に位置し、観光地としてイメージは全くない中山間地域である。

「川西地区」は、人口1,115人、世帯数426戸、9つの自治区で構成され、内4自治区で高齢化40%を超え、2自治区で50%を超えるいわゆる「限界集落」も存在する地域である。また、7自治区で50世帯を下回る小規模集落で構成されている地域でもある。地域に広がる棚田や溪流沿いに広がる畑には小規模ながら多品目の野菜が栽培されている。この地域は由布院の温泉旅館に直接有機野菜を配達している若い専業農家や竹炭を何とか活かそうとしているIターン者もいる、中山間地域の新たな動きを感じる地域でもある。

さらにもっとも高齢化率が高い集落には、由布院の温泉にも引けを取らないコバルトブルーの「秘湯の宿奥湯の郷」と親しまれている地域の温泉旅館がある。



山間地域の中で限られた地域に棚田が広がる。しかし大半は大分川とその支流沿いに広がる小さな畑が多い。

2. 地域の課題

由布市では、昨年度から「由布コミュニティ（地域の底力再生）事業」（以下「コミュニティ事業」と略）を推進している。今年度川西地区が対象となり9自治区で構成され小学校区という広域的な地域であることから、従来のワークショップだけでなく地域振興アドバイザー派遣事業と合わせて推進している。このコミュニティ事業は、ワークショップ（WS）を通じて「地区力点検（WS 1回～2回：Check）」、「計画の策定（WS 3回～4回：Plan）」、「計画の実施（出来ることから実施：Do）」という流れで取り組み、初年度から（活動の）助成金として30万円、2年目20万円、3年目20万円が支出されるユニークな事業である。

地域振興アドバイザー派遣と同時にすでに川西地区では、いわゆる「宝探し型ワークショップ」が行われ、川

西小学校の子ども達の参加の下に、22の「宝」を探しだし、その中から「さらにイチオシ」として7つの項目を抽出し、それらを活かすためのアイデアや方法がまとめられている。

第1回目のアドバイザー派遣では、第1回WSの成果をどう活かすのか、集落の存続を担う後継者をどう確保するのかということが大きな課題となった。そして「宝探しWS」から始めているために地域の抱えている問題の本質を捉えられていないのではないかなどの問題を感じた。その後第2回目のWSでは、第1回のWSを踏まえて「情報発信—内外へのPR」「面白イベント—体験・交流」「安心農産物エコ川西—農林を活かす」「生活環境—自然環境の整備」という4つのカテゴリで再構成しWSを行っているもののその関係性が見えない。

今回の事業は、上記のWSをコーディネートしているコンサルが基本的に事業の中核を担っているものの、対象地域が広域のため効果的な進め方になっていないのではないかという疑問を感じている。徳野アドバイザーが提案した「集落点検調査」についてもその趣旨が理解されないまま、実施に関して棚上げ状態になっている。「宝探し」として地域資源を見いだしてもその活用方法についてはしっかりとした地域資源の考え方がないと一般的な捉え方（机上での誰がどのようにして実施するかという一般的な捉え方）で終わってしまうのではないかという危惧を感じている。

3. 今後の方向

もう一度、由布市のコミュニティ事業の趣旨（計画づくり）を考えて、地域の問題点を整理し、その解決のための方向性や具体的なアクションプラン（行動計画）を策定する道筋を明確にすることが必要であろう。その実践に可能な地域資源が豊富にあり、そのための人材も揃っていると考える。そのような動きに呼応して、徳野アドバイザーが指摘している他出している家の後継者に伝えていくことが「限界集落」と言われている集落にこそ必要な取り組みではないだろうかと考える。いままでのWSで様々な意見が出されているし、すでにいくつかのアクションプランが提起されている。それぞれのアクションプランの関係性を検討し連携させ、地域全体の問題と課題を明らかにして、その解決に結びつけることが重要である。まずは地域の小さな問題でも、確実に成果に結びつき波及効果が高くなるようなアクション（簡易で費用がかからない誰でもが参加できる事業）を各集落で選び出し、実践することをアドバイスしていきたい。

編集・発行

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-11-7 第二文成ビル201
財団法人 日本地域開発センター
TEL. 03 (3501) 6856 FAX. 03 (3501) 6855

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3
国土交通省都市・地域整備局地方振興課
TEL. 03 (5253) 8404 FAX. 03 (5253) 1588